

## 第19回ヤンマー学生懸賞作文 銅賞

### 共に歩みたい

44期生 関望

「家が牛飼いやなかったって牛が好きなんや。だから、牛と共に歩みたい。もっと牛を知りたい。」それは、私が農業の世界へ引き込まれたきっかけでした。そして、私は高校の3年間で牛について学びました。

入学してからは全てが始めてで牛にどう接したらいいのか分かりませんでした。接し方が分からずも毎日牛舎に通いました。まず私は、繁殖和牛の名前を覚える事からしていきました。次に和牛子牛、そして、肥育牛と少しずつでしたが名前を覚えていきました。一頭一頭手入れをしながら名前を呼び触れ合うことで牛の接し方も分かるようになっていきました。その頃には牛舎に居ることが楽しみで夜遅くまで牛舎に居ました。牛舎では、牛から多くの事を学ぶことが出来ました。

高校生活2年目の冬に、私はある初産の牛に出会いました。真冬の寒さの中で初産と言うこともあってか、牛舎には緊張が走っていました。そんな冬の朝、産まれた子牛は24kgの元気な雄子牛でした。初乳を飲ませた後、おぼつかない足どりで母牛のもとへ歩いていきました。母牛は子牛を見つめ乳を飲ましてやるのかと思ったのもつかの間、寄ってきた子牛を蹴り飛ばしたのです。それでも子牛は何度も何度も母牛に寄っていきました。そのたびに蹴り飛ばされ、母牛に近寄ることすらできませんでした。完璧な育児放棄でした。

1週間ほどしてから、同時期に出産を終えた3頭の親子と育児放棄をしたあの親子を同じ分娩房に入れていました。しかしあの牛だけは誰も寄せ付けませんでした。あの出産の日以来、数人の友達と一緒に人工哺乳をしていました。哺乳をするために親の見える隣の独房へその子牛を移動させました。初めは、1.5リットルを1週間飲ませました。そして、2リットルに増やし10日ほど飲ませた頃、急にミルクを飲まなくなり、同時に下痢もしました。原因が分からないがまず、下痢を抑えるため薬を投与しました。ミルクを飲まなくなって2日目の朝には、隣の分娩房にいた子牛全頭も、下痢になっていました。そのことから、ミルクの飲み過ぎなのではなく、感染性の病気だろうと、獣医さんに診察に来てもらいました。「詳しい原因は分からないが、一気に下痢が広まっているから唾液や、鼻どうしの接触、糞をなめるなどをしたことで感染したのではないか」と診断されました。私たちは、下痢を最小限に抑えるため、他の子牛と接触しないようにさせ、下痢の薬を投与し続けました。しかし、育児放棄をうけたあの子牛は、良くなるどころか、徐々に食欲もなくなり、体力が落ちていきました。そして、もう一度獣医さんに診察してもらいました。すると、ウイルスで下痢になり、免疫力がなくなり肺炎をおこしていました。さらに、中耳炎も引き起こしていました。新種のウイルス感染からの合併症でした。私たちは、先生と共に新種のウイルスについて、もう一度勉強し、その子牛に何をしてあげられるか、もっと真剣に考えていくことにしました。生かすも殺すも私たちの手にかかっていた。

「真剣に向き合い真剣に思えば、いつかはむくわれる日が来る。」そう信じて毎日名前を呼びかけ、少しでも元気になってくれるよう子牛と向き合い嫌がっていた薬も無理矢理にでもちゃんと飲ませました。私たちの思いが通じたのか、子牛は徐々に元気になっていきました。まだ寒さが残る季節だったので、免疫力もなく弱っている子牛が、風邪など引いてしまわないように、私たちが着なくなったトレーナーを子牛用の防寒着に仕立て着させてやりました。下痢で汚くなったお尻やしっぽも毎日毎日ふいてやりました。

まだ肌寒い春の朝、いつもの様にミルクをあげに子牛の元へ行くと横たわっていました。慌てて駆け寄り名前を呼びかけてもかすかに反応するだけで起きあがろうともしませんでした。手足も冷えきって動かすことも何もませんでした。先生と一緒に頑張ってきた友達に子牛の様態を伝えみんなが来るのを待ちました。その間、子牛を暖めてやり何度も何度も名前を呼び続けました。周りの牛たちも心配だったのか、子牛の方を見ながら低く悲しい声で何度も何度も泣き続けていました。全員が揃い子牛にとって今一番良いのはどうしてあげるべきなのか考えました。答えは全員同じ安楽死させてあげることでした。先生にそのことを告げると先生は、「良くその答えが出せたな。こいつが弱ったんはお前らのせいやないぞ。元々ダメやったんや。それやのにここまで生きれたんはお前らのがんばりがあったからや。お疲れさま。」と、優しく私たちを包み込んでくれました。その言葉に涙があふれました。『生かすも殺すも私たちの手にかかっている。』本当にそうだと思います。その日の午後に解剖へ連れていくことになりました。行く準備をすませ、軽トラの荷台に子牛を積み、ブルーシートをかけてやりました。骨が分かるくらいガリガリになっていて、とても冷たくなっていました。家畜保健衛生所へ着き子牛を降ろしてやると、さっきまで立つことも泣くこともなく動くことすらできなかった子牛が元気に走りまわり、私たちの声に話しかけるかのように高く泣いて、しっぽを力一杯ふっていました。私は、「何で今になって、なんでここに来てからそんな行動とんの。何でなん。もっと早かったら殺さんですんだかもしれんのに。」その時そんな風におもいました。麻酔を通常の倍打った5～10分後によく息絶えるかのように座り込みました。それまでは、ひたすら歩き回り、泣いていました。解剖が始まると今まで子牛と共に頑張ったさまざまな思い出と共に涙があふれ出しそうになりました。でも、涙をこらえ最後の最後までしっかりと目に焼き付けました。獣医さんが解剖をしながら子牛がどういう状態だったのか詳しく説明をしてくれました。結果は、「ウイルスによって、腸のリンパが張れているカタル性腸炎と、気温などの環境変化が激しかったため、肺炎になっていた」と言う合併症が原因でした。皮膚もホルモンバランスがくずれ、ストレスから自分の体をなめていたため毛が抜けていました。臓器もボロボロになっていました。その話を聞きながら、私は、何もしてあげられず、何も分かってあげられない事が悔しくてたまりませんでした。

子牛の解剖の後から私は、少しの間、牛舎に行くことが出来ませんでした。しかし、ある人の一言で私は、また牛舎に行くことができるようになりました。それは、「あんたは、人間やから痛い所があればどうして欲しいか言葉で伝えられる。やけど牛にはあんた見た

いに言葉で伝えられんのか。だけど、牛にだって伝えようとしとる事はあるはずやで。それをあんたが、心の耳で聞いてやったら良いやんか。なんのために毎日遅くまで牛舎に行ってるんや？牛が好きやからやろ。やったらがんばらなどうするの。牛は、あんたをまっとなやで。」と、力強く背中を押してくれた母がいたからでした。それから私は、高校を卒業するまでの少しの間牛舎に通い言葉は分からないけれど、牛と会話をしました。

そして高校を卒業した今も、牛から逃げることなく牛と向き合っています。獣医師になって病気になった牛たちを助けてやりたいけれど、もっともっと牛の事を知り牛と共に生きて行きたいから私は、獣医師にはならず牛飼いになりたいと思っています。今私に出来ることは、尊い命と共に生きていくことです。それがあの子牛に教わった事だから。